奈良御集注釈

笹川博司

〔凡例〕

一、本注釈は、冷泉家時雨亭叢書『平安私家集九』（朝日新聞社）所収「奈良御集」を底本とする注釈である。

一、底本の翻字に際しては、次の方針に従った。

(1) 和歌には、それぞれ通し番号を漢数字で付し、適宜、仮名に濁点を付し、意味の切れ目に空白を置いた。

(2) 詞書は、和歌に対して二字下げとし、適宜、濁点・句読点や「　」を付した。

(3) 改行は底本に従い、丁附を　」二オ、　」二ウなどと示した。オは表の、ウは裏の、略記である。

(4) 解釈上、本文を改めた場合は、その箇所に傍点「、」を付し、【語釈】に注記した。

一、注釈にあたっては、【異同】【通釈】【語釈】【他出】【参考】の項目を立て、次の方針に従った。

(1) 【異同】は、宮内庁書陵部蔵「奈良御門御集」（五〇一・八四五）との異同を示した。なお、底本の様相や、底本の忠実な写本である書陵部蔵「奈良御集」（五〇六・七五）との異同がある場合も、これを注記した。

(2) 【通釈】は、簡潔で分かりやすい現代語訳となるよう努めた。

(3) 【語釈】は、注意すべき語に限った。取り上げた語句については、できるだけ論拠や用例を示すよう留意した。

(4) 【他出】は、同歌が他の歌集に収められている場合、それを掲出した。

(5) 【参考】は、同歌に関連して参考になる点を記した。

一、宮内庁書陵部蔵「奈良御門御集」（五〇一・八四五）に補入されている四首についても、補1～4として簡単に注釈した。

一、注釈に引用する作品の本文は、次の通りとした。

(1) 和歌は、特に断らない限り、新編国歌大観（角川書店）の本文に拠った。ただし万葉集は、西本願寺本の訓・旧国歌大観の番号で示す。

(2) 散文は、特に断らない限り、新日本古典文学大系（岩波書店）の本文に拠った。

一、本稿は、本大学非常勤講師増田正子氏と共同で行っている平安私家集研究の成果の一部である。

奈良御集

古　一　ふるさとゝなりにしならのみやこにも
　　いろはかはらずはなさきにけり

【異同】○奈良御集　奈良御門御集　○古　古今　○歌右肩　集平城　○みやこ　都　○いろ　色　○はな　花　その下に補入記号を入れ、傍記「古今はさきけり」

【通釈】旧都となってしまった奈良の都にも、色は変わらず花が咲いたことだ。

【語釈】○ふるさと　以前、都などがあって栄えたが、今はさびれている土地。旧都。『万葉集』の「大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首／古郷之　飛鳥者雖有　青丹吉　平城之明日香乎　見楽思好裳」（巻六・九九二）は、平城京遷都後の養老二年（七一八）「旧都」となった飛鳥の法興寺（飛鳥寺）を平城京の地に移し、天平年間に栄えた「元興寺」の素晴らしさを詠む。○なりにし　なってしまった。「に」は完了、「し」は過去。もはや昔に還れない状態をいう。『万葉集』に「狭野方波　実尓成西乎　今更　春雨零而　花将咲八方」（巻十・一九二九）など。○ならのみやこ　平城京。『万葉集』に「大宰少弐小野老朝臣歌一首／青丹吉　寧楽乃京師者　咲花乃薫如　今盛有」（巻三・三二八）など。○いろはかはらず　姿・風情は変わることなく。『万葉集』に「咲花乃　色者不易　百石城乃　大宮人叙　立易去」（巻六・一〇六一）など。○はなさきにけり　花が咲いたなあ。「に」は状態の発生、「けり」は発見の詠嘆。『万葉集』に「恋之久者　形見尓為与登　吾背子我　殖之秋芽子　花咲尓家里」（巻十・二一一九）など。

【他出】

○『古今和歌集』春下・九〇　九〇五年成立。
　ならのみかどの御うた
ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけり

○『新撰和歌』六三　九三四年成立。
古郷となりにしならのみやこにもいろはかはらではなぞさきける

○『新撰朗詠集』四八七、奈良帝　藤原基俊撰。一二世紀前半。
　故京
故郷と成りにしならの都にも色はかはらず花ぞさきける

○『五代集歌枕』一七八四　藤原範兼編。一二世紀半ば。
　ならのみやこ　大和国　奈良天皇
ふるさととなりにしならのみやこにもいろかはらずは花ぞさきける

○『袋草紙』一八、奈良帝　藤原清輔作。一一五九年成立。

古郷と成りにしならの都にも色はかはらず花ぞ咲きける

○『今鏡』一五三、大同の御製（平城天皇）一一七〇年頃成立。

ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花ぞ咲きける

○『万葉集時代難事』四九、奈良帝　顕昭作。一一八三年頃。

ふるさととなりにしならの宮古にも色かはらずぞ花は咲きける

○『柿本人麻呂勘文』二〇、奈良帝　顕昭作。一一八四年。

古里となりにしならの都にも色かはらずぞ花はさきける

○『定家八代抄』一〇四　一二一六年頃成立。

題しらず　平城天皇御製

古郷となりにしならの都にも色はかはらずはなはさきけり

○『秀歌大体』二五　一二三二年頃成立。

ふる郷となりにしならの宮こにも色はかはらず花はさきけり

【参考】巻首題に「奈良御集」「奈良御門御集」とあるが、「奈良」「奈良御門」とは何天皇なのか。古来、（1）人麿時代の文武天皇とする説、（2）奈良時代の代表的な帝である聖武天皇とする説、（3）平安京遷都後の平城天皇とする説、など諸説ある。しかし、この巻頭歌が「ならの帝」作とすれば、「ふるさととなりにし奈良の都にも…」と平城京が旧都になってからの歌としか解し得ないところから、平安京遷都後の平城天皇の作とするほかない。片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社）は「本来は「題知らず・よみ人知らず」の歌であったのに、「ふるさととなりにしならの都…」という歌の内容から、平城の都に再び都を遷そうとして果たせず、崩御後に平城に葬られた悲劇の人である平城天皇に仮託されたという可能性も高い」とする。古今集の諸本のうち雅俗山荘本や静嘉堂文庫蔵伝為相筆本では、本集二番歌や三番歌と同様、「だいしらず・よみびとしらず」とし、左注に「あるひとのいはく、このうたはならのみかどのおほみうたなり、と」とある。これが本来の形であろう。

人事の無常と自然の不変を対比して詠嘆する本歌は、他出に挙げたように、下の句が「色はかはらず花はさきけり」「色はかはらず（で）花ぞさきける」「色かはらずは花ぞさきける」「色かはらずぞ花はさきける」など助詞の使い方が様々に揺れている。上の句の「…にも」を受けて「～は」と述べるのは、「あきはぎのかぜにみだれてこぼれしく　つゆのうへにもはなはさきけり」（入道右大臣集・六八）や「おいきにもはなはさきけり　ちはやぶるゆきにぞみゆる　かみのしるしは」（四条宮下野集・一九四）などのように、よく見られる構文である。しかし、対比を強調する気持が「色は」「花は」と「は」の重複を誘い、また一方で、それを避けようとする意識が働き、「ぞ」で強調するなど、助詞の使い方に揺れが生じたということだろう。古今集の諸本にも同様の本文の揺れがある。その中で、本集と同じ「色はかはらず花さきにけり」の本文を持つのは、雅経筆崇徳天皇御本である。

古　二　蘭子の露たまにぬかむとゝればけぬ

よし見むひとはえだながら見よ

【異同】○古　古今　○蘭子の露　萩のつゆ　○たま　玉　○ぬかむと　ぬかむ　その下に補入記号を入れ、傍記「と歟」　○ひと　人

【通釈】萩の露は、玉のように緒に通そうと手に取ると消えてしまう。仕方がない、もし見る人がいたら、枝のまま見よ。

【語釈】○**蘭子の露**　萩の露。『万葉集』に「棹壮鹿之　朝立野辺乃　秋芽子尓　玉跡見左右　置有白露」（巻八・一五九八、家持）などとあるように、「はぎ」は「芽子」と表記されたが、「蘭子」という表記は他に用例を見ない。「露」を「玉」に譬えるのは漢詩に多い。『文選』巻十六に「秋の露、珠の如し」（梁・江淹「別賦」）など。○**たまにぬかむと**　玉のように緒に通そうと思って。『万葉集』に「吾屋戸乃　草花上之　白露乎　不令消而玉尓　貫物尓毛我」（巻八・一五七二、大伴家持）など。○**とればけぬ**　手に取ると消えてしまう。『万葉集』に「白露乎　取者可消　去来子等　露尓争而　芽子之遊　将為」（巻十・二一七三）など。○**よし見むひとは**　仕方がない、もし見るのなら、その人は。不満足ながら容認し、それを踏まえて行動を起こそうとする気持ちを表す「よしさらば」という慣用句がある。『後十五番歌合』に「よしさらばつらきは我にならひけりたのめてこぬは誰かをしへし」（一五、清少納言）など。その「さらば」に代わり、「見む人」の「む」で、仮定を表す。『万葉集』に「吾岳之　秋芽花　風乎痛　可落成　将見人裳欲得」（巻八・一五四二、旅人）など。○**えだながらみよ**　枝のまま見よ。『拾遺和歌集』に「天暦御時、殿上のをのこども紅葉見に大井にまかりけるに　源兼光／枝ながら見てをかへらんもみぢばはをらんほどにもちりもこそすれ」（秋・二〇一）など。

【他出】

○『古今和歌集』秋上・二三二　九〇五年成立。

題しらず　よみ人しらず

萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ

ある人のいはく、この歌はならのみかどの御歌なりと

○『古今和歌六帖』三六四〇、ならのみかど　一〇世紀後半。

はぎのつゆたまにぬかんととればけぬみん人はなほよそながらみよ

○『家持集』二二一　一一世紀前半成立。

はぎのつゆたまにぬかんととればきえぬ

みん人はなほえだながら見よ

○『袋草紙』一九、読人不知　藤原清輔作。一一五九年成立。

萩の露玉にぬかむととればけぬよしみむ人は枝ながら見よ

○『今鏡』一五四、よみ人不知　一一七〇年頃成立。

萩の露玉にぬかむと取れば消ぬよし見む人は枝ながら見よ

○『万葉集時代難事』三五、奈良帝　顕昭作。一一八三年頃。

萩の露たまにぬかむととればけぬよしみる人はえだながらみよ

○『柿本人麻呂勘文』二一、読人不知　顕昭作。一一八四年。

萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながらみよ

○『定家八代抄』三二五　一二一六年頃成立。

題不知　読人不知

萩の露玉にぬかんととればけぬよしみん人は枝ながらみよ

【参考】他出に挙げたように『古今和歌六帖』では、下の句が「みん人はなほよそながらみよ」という本文である。「なほよそながら」という本文が現れるのは、「よし」や「えだながら」という表現があまり一般的でなかったからであろう。後世、「よし見む人は」という表現は、建長八年（一二五六）に前内大臣藤原基家（一二〇三～八〇）が催した『百首歌合』所収の「涙にぞ今は我が身をまかせつるよしみむ人はあはれしれとて」（一四〇二）や後藤基政（一二一四～一二六七）の私撰類題和歌集『東撰和歌六帖』所収の「山桜よし見ん人は雲とみよわれこそゆきてをらばをりてめ」（一六二）などのように、少しずつ用いられるようになるが、平安和歌においては、本歌にしか用例がない。さらに時代が下ると、三条西実隆（一四五五～一五三七）の家集『雪玉集』の「あさみどり枝に玉ぬく青柳やよしみん人は萩の上の露」（二四五）、烏丸光広（一五七九～一六三八）の家集『黄葉集』の「をらでのみよしみんはぎの枝ながら映ふ水は露ぞおきそふ」（七六二）などのように、本歌に基づく詠歌も現れる。一方、平安和歌における「枝ながら」「よそながら」の用例数を比較してみると、「枝ながら」の用例は、本歌以外には語釈に挙げたものを含め六例しかないのに対して、「よそながら」の用例は、『後撰和歌集』の「梅花よそながら見むわぎもこがとがむばかりのかにもこそしめ」（春上・二七）をはじめ、一〇四例にも上る。

このように「よし見む人は」「枝ながら」という歌句のもつ、あまり一般的でない、ぎこちないニュアンスがかえって古風な詠みぶりと感じられ、本来「よみ人しらず」だった本歌が「ならのみかどの御歌」に仮託されていくことになったのであろう。

古　三　たつたがはもみぢみだれてながるめり
　　わたらば錦なかやたえなん　一一ウ

【異同】○古　古今　○歌右肩　集文武　○たつたがは　たつ田河　○錦　にしき　○なか　中

【通釈】竜田川に乱れ散った紅葉が、様々な色糸で織り出された錦のように絢爛たる様子で流れているのが見える。そんな竜田川を渡ったら、せっかくの錦の途中が切れてしまうだろうか。

【語釈】○たつたがは　竜田川。『古今集』以後、紅葉の名所として頻出する。『万葉集』には「竜田川」は一例も見えず、専ら「竜田山」が詠まれる。平城京に都が置かれていた時代、「竜田山」は河内から大和へ入るルートに位置する山として、例えば『万葉集』の「大伴乃（オホトモノ）　美津能等麻里尓（ミツノノトマリニ）　布祢波弖弖（フネハテテ）　多都多能山乎（タツタノヤマヲ）　伊都可故（イツカコ）延伊加武（エイカム）」（巻十五・三七二二）のように、遣新羅使が帰京の旅の途上、竜田山を越えれば、懐かしい奈良の都は眼下に見えるという思いで詠まれた。しかし、都が平安京に遷ると、「竜田」は、「ふるさ

と」となった平城京の遥か西方で、実際に訪れる機会も少なくなり、『古今集』の「二条の后の春宮のみやす所と申しける時に、御屏風にたつた河にもみぢながれたるかたをかけりけるを題にてよめる／もみぢばのながれてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ／ちはやぶる神世もきかず竜田河唐紅に水くくるとは」（秋下・二九三、そせい／二九四、なりひらの朝臣）などのように、屏風などに描かれた紅葉の名所として「竜田川」が多く詠まれていくのである。○**もみぢみだれてながるめり**　古今の諸注、紅葉が乱れて流れているように見える、と現代語訳して済ませるものが多い。しかし、「乱れて」がどうような状態なのか、必ずしも明確ではない。「みだれて」は、「紅葉」との関連で言えば、『後撰集』の「秋の夜に雨ときこえてふりつるは風にみだるる紅葉なりけり」（秋下・四〇七）などのように、紅葉が風に舞い散る様子と考えるのが最も自然である。「もみぢみだれちりて」あるいは「もみぢちりみだれて」などという本文であれば分かりやすい。ところが、こういう解釈を明記するのは本居宣長『古今集遠鏡』の「紅葉ガチリミダレテ」ぐらいである。『新撰和歌』の「ゆく水にみだれてちれるさくら花きえずながるる雪とみえつつ」（八三）は、その桜バージョンと言える。『教長集』の「よしのがはなのしらなみながるめりふきにけらしなやまおろしのかぜ」（一三五）は、「竜田川」を「吉野川」に換え、「紅葉」を「桜」に替えた詠歌である。一方、「みだれて」が「流る」にかかっていることも否定できない。窪田空穂『古今和歌集評釈』（東京堂）は「「みだれて」は、下の「流る」の状態で、一面にといふ程の意」とするが、これは余りに簡単な処理で、やはり、竜田川が乱れ散った様々な色の紅葉によって縦糸・横糸が錯綜するように入り交じって織られた錦が絢爛たる様子で流れているように見えるという表現であろう。「めり」は視覚による推量。作者は、旅中にあって、竜田川の堤、あるいはやや小高い丘の上に立ち、そこから竜田川を眺望する視点で詠んでいる。○**錦**　数種の色糸で地織と文様を織り出した織物。『万葉集』には「もみぢ」を錦に見立てる表現は見えない。「錦」は、もともと奈良時代に中国から入ってきた高級な織物で、仏事の装飾や一部の貴族の間で用いられていたに過ぎず、「もみぢ」が錦に見立てられるのは、『懐風藻』に「山機霜杼織葉錦（山は機、霜は杼にして、葉を錦に織る）」（述志、大津皇子）などと見えるように漢詩から学んだ結果であると考えられる。菅原道真が「このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」（古今集・羇旅・四二〇）と詠んだ当時は、「紅葉の錦」はかなり新鮮な比喩だったと考えられる。『古今集』仮名序に「秋のゆふべ竜田河にながるるもみぢをばみかどのおほむめにしきと見たまひ、春のあしたよしのの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおぼえける」などとあることから、紀貫之も、竜田川を流れる紅葉を錦に見立てる古今集所収歌を、左注同様、「みかど」詠と考えていたことが知られる。○**なかやたえなん**　中間がきっと途切れてしまうだろうか。「や」は疑問の係助詞。「な」は完了（強意）の助動詞

「ぬ」の未然形。「む」は推量の助動詞「む」の連体形。「絶え」から連想で「なか」を男女の仲の意で用いた歌も詠まれた。『拾遺集』に「限なく思ひながらの橋柱思ひながらに中やたえなん」（恋四・八六四）など。

【他出】

○『古今和歌集』秋下・二八三、二八四　九〇五年成立。

題しらず　よみ人しらず

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

この歌は、ある人、ならのみかどの御歌なりとなむ申す

たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又は、あすかがはもみぢばながる

○『新撰和歌』一一八　九三四年成立。

立田川もみぢみだれてながるめりわたらばにしきなかやたえなん

○『大和物語』第百五十一段　九五一年頃成立。

おなじみかど（ならのみかど）、たつたがはのもみぢ、いとおもしろきを御らむじける日、人まろ、

たつたがはもみぢばながる

神なびのみむろのやまにしぐれふるらし

みかど、

たつたがはもみぢみだれてながるめり

わたらばにしき中やたえなむ

○『五代集歌枕』一二五三　藤原範兼編。一二世紀半ば。

たつたがは　読人不知

たつたがはもみぢみだれてながるめり

わたらばにしきなかやたえなん

○『袋草紙』二〇、奈良帝　藤原清輔作。一一五九年成立。

竜田河紅葉みだれてながるめり渡らば錦中や絶えなむ

○『今鏡』一五二、奈良の帝　一一七〇年頃成立。

竜田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ

○『万葉集時代難事』三六、奈良帝　顕昭作。一一八三年頃。

立田川もみぢ乱れてながるめり渡らば錦なかやたえなむ

○『柿本人麻呂勘文』二二、よみ人しらず　一一八四年成立。

竜田川もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

○『定家十体』二六四、文徳天王　一二一六年頃成立。

たつた川もみぢみだれてながるめりわたらばにしき中やたえなん

○『定家八代抄』四五八　一二一六年頃成立。

題しらず　文武天皇御製

立田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなん

【参考】他出に挙げたように『大和物語』には、『古今集』二八四番歌を「人まろ」詠とし、これと君臣和楽唱和する形で、本歌が「ならのみかど」詠として収められている。これを根拠に、『定家八代抄』は、「ならのみかど」＝文武天皇説を採り、本歌を「文武天皇御製」とした。しかし、唱和にふさわしい措辞表現上の対応関係がほとんど認められない。『大和物語』作者の作為か、当時行われてい

た伝承の反映であろう。

四　みそらゆく月のひかりは　あまた夜の　ひとよもおちずゆめに見えつゝ

【異同】○みそら　み空　○ひとよ　ひとつ　○ゆめ　夢

【通釈】空を行く月の光（のようなあなた）は、多くの夜の、一夜も欠かさず、夢に現われることだ。

【語釈】○**みそらゆく月のひかり**　空を行く月の光。「みそらゆく」は「月」の慣用的修飾語。「み」は美称。『万葉集』に「三空去月之光二直一目相三師人之夢西所見」（巻四・七一〇、安都扉娘子）など。○**あまた夜**　多くの夜。『万葉集』に「安須可河泊世久登之里世波安麻多欲母為祢弖己麻思乎世久得四里世波」（巻十四・三五四五）など。○**ひとよもおちずゆめに見えつゝ**　一夜も欠かさず、夢に見えることだ。『万葉集』に「我心等望使念新夜一夜不落夢見」（巻十二・二八四二）「於毛比都追奴礼婆可毛登奈奴婆多麻能比等欲毛意知受伊米尓之見由流」（巻十五・三七三八）など。「つつ」は、本来、反復を表す接続助詞だが、歌末の「つつ」は詠嘆を表す終助詞的用法。

【他出】ナシ

【参考】「みそらゆく月のひかりは」の語釈に挙げた万葉集巻四所収歌は、月の光でたった人目見た人が夢に見えるといい、「ひとよもおちずゆめに見えつゝ」の語釈に挙げた万葉集巻十五所収歌は、毎晩欠かさず恋人が夢に見えるという。本歌においても、毎晩欠かさず夢に見えるのは、やはり恋人と考えられよう。「み空ゆく月の光」とは、かぐや姫や光源氏の如き、光り輝く憧れの恋人の暗喩であろう。

本歌は、語釈に挙げたように『万葉集』に見える古風な表現によって構成されているが故に、『奈良御集』の一首として採られたのであろう。

五　つき草にすれるころもの　いちしるく　こひばひとみてゆさにせむかも

【異同】○いちしろく　いちしなく　○ひと　人　○ゆさ　ゆき

【通釈】ツユクサで染めた衣のように、はっきりと顔色に出して恋い慕ったら、人が見て知るところとなり、嘆くことになるのだろうかなあ。

【語釈】○**つき草にすれるころもの**　ツユクサで染めた衣のように。「つき草」は、ツユクサの古名。青色の染料となるが、色があせやすいので、人の心の移ろいやすさの譬えとされる。『万葉集』に「月草尓衣者将摺朝露尓所沾而後者徙去友」（巻七・一三五一）など。「の」は比喩の格助詞。○**いちしるく**　はっきりと。傍記の「いちしろく」は、「著しく」の古形。『万葉集』に「展転

恋者死友灼然　色庭不出　朝容貌之花」（巻十・二二七四）など。「絶沼之　下従者将恋　市白久　人之可知　歎為米也母」（巻十二・三〇二一）「去家而　妹乎念出　灼然　人之応知　歎将為鴨」（巻十二・三一三三）などのように、恋心が抑え切れず「はっきりと人に気づかれてしまうような」溜息をつくという恋の「嘆き」の文脈で用いられた。『古今和歌六帖』には「秋萩のうへに置きたるしら露のいちしろくしもわがこひめやも」（一・五六五）、「ふなばりの軒にふりおほふ白雪のいちしろくしもこふるわれかも」（一・七四四）、「こもりえのしたにこひあさりしらなみのいちしろくいでぬ人のしるべく」（五・二六八六、やかもち）、「みちのべのいちしのはなのいちしろく人みなしりぬいもにこひすと」（六・三九六三）などと見え、「いちしろく」を、「白露」「白雪」「白浪」のように色彩の「白」から導いたり、「壱師の花」（ギシギシ（羊蹄）の古名か）の音「イチシ」から導いたりして、忍び切れない恋の激しさを詠む例もある。○こひばひとみて　新編国歌大観・新編私家集大成ともに「こひは」と読むが、「こひば」と条件句として読むのがよい。また、「みて」の箇所（図1）を、新編私家集大成では「みし」と読んでいるが、底本の仮名は、やはり「し（之）」ではなく「て（弖）」であろう。七番歌の初句「さほ過て」（図2）の「て」と比較すれば明らかである。新編国歌大観のように「みて」と読むのが正しい。『万葉集』に「色出而　恋者人見而　応知　情中之　隠妻波母」（巻十一・二五六六）など。○ゆさにせむかも　「ゆさに」は未詳。「せ」はサ変動詞「す」の未然形。「む」は未来の事柄を推量する助動詞。「かも」は詠嘆の終助詞。「いちしろくこひば、ひとみて…せむかも」は、はっきりと顔色に出して恋い慕ったら、人が見て…するのだろうかなあ、の意。

図1

図2

【他出】ナシ

【参考】本歌は、「いちしるく」の語釈の用例に挙げた万葉集巻十二所収歌を参考にすると、「ゆさに」は「なげき」であった可能性もあろう。底本では「遊散尓」を字母とする仮名だが、もともと「奈計支（なげき）」とあったものが、「由佐尓（ゆさに）」と誤読され、やがて底本のような仮名で写されたとも考えられる。一つの可能性として指摘し、とりあえず「なげきせむかも」の本文で通釈しておく。

六　くるゝひのあけむそらだにまたずして
　　まどひもわれがこひわたる
　　かな　」二オ

【異同】○ひ　日　○そら　空　○またずして　宮内庁書陵部蔵「奈良御集」（五〇六・七五）は「またずて」　○こひ　恋

【通釈】 暮れる日が明日になれば又明けるのに、その夜明けの空さえ待つ心の余裕もない状態で、この闇に迷い、途方に暮れて、私はずっと恋し続けることです。

【語釈】 ○くるゝひ　暮れる日。『後撰集』に「神な月時雨ふるにもくるる日を君まつほどはながしとぞ思ふ」（冬・四六一）など。○あけむそら　時が経てば、明ける空。「む」は、仮定・婉曲の助動詞。未だ明けていない空だが、やがて時間が経過すれば明けることを示す。『一条摂政御集』の「人のもとより、あかつきに、とくとくといそがされいでたまて／とりのねにいそぎいでにしつきかげののこりおほくてあけしそらかな」（二〇八）の場合は、既に明けた空である。○まどひも　道に迷い、途方に暮れて。「も」は強調の係助詞。「まどひも」は落ち着きが悪く、「も（无）」は、あるいは「て（天）」の誤写か。『古今和歌六帖』に「ちるはなにいへぢまどひてこのさとにわれはよねにぞながゐしにける」（六・四〇三五、つらゆき）など。○われがこひわたる　私はずっと恋い続ける。「わたる」は時間の継続を示す補助動詞。『万葉集』に「雖念　知僧裳無跡　知物乎　奈何幾許　吾恋渡」（巻四・六五八）など。

【他出】 ナシ

【参考】 片恋ゆえに激しい恋。あるいは何か事情があって男が女のもとへ逢いに行けない状況下での恋歌。日が暮れて、本来であれば、男が女に逢いに出かけてもおかしくない夜、男は、闇に迷い、恋心に苦しんでいる。『万葉集』の「左丹頬経　妹乎念登　霞立　春日毛晩尓　恋度可母」（巻十・一九一一）「安波思麻能　安波自等於毛布　伊毛尓安礼也　夜須伊毛祢受弖　安我故非和多流」（巻十五・三六三三）などが同想。

※「奈良御門御集」（五〇一・八四五）には、六番歌と七番歌との間に補入記号を付し、その行間に細字で、次の歌が書き入れられている。

補1　しめかへていつくやしろも　こへぬべくおもほゆるかな
　　事のしげきに

【通釈】 注連縄を張り替えて、穢れを忌み、清浄を守って神に仕える、この社さえも、踏み越えてしまいそうに思われることです。人の噂が喧しいので。

【語釈】 ○しめ　神の居る地域であるため、立入を禁ずることを示すしるし。マ行下二段動詞「占む」の連用形からの転成名詞。「標」「注連」などの漢字を当てる。『万葉集』に「祝部等之　斎経社之　黄葉毛　標縄越而　落云物乎」（巻十・二三〇九）など。○いつく　穢れを忌み、清浄にして、神に仕える。「いつ（厳）」の派生語。類義語「いはふ（斎・祝）」との意味上の区別は、古代では、「いつく」は対象を崇める面が強く、主に神官の行為で、「いはふ」は吉事を招くという目的の面が強く、一般人の行為も含む。『万葉集』に「住吉尓　伊都久祝之　神言等　行得毛来等毛　舶波早家無」（巻

十九・四二四三）など。○**やしろもこへぬべくおもほゆるかな**　神社の聖域（神域）も犯してしまいそうに思われることだなあ。「こへ」は、ヤ行下二段活用動詞「越ゆ」の連用形なので、歴史的仮名遣いでは「こえ」。『万葉集』に「木綿懸而　斎此神社　可超　所念可毛　恋之繁尓」（巻七・一三七八）など。○**事のしげきに**　人の噂がひどいので。『万葉集』に「君尓因　言之繁　乎　古郷之　明日香乃河尓　潔身為尓去」（巻四・六二六）など。

【他出】ナシ

【参考】このままでは、結句と第四句までの表現がうまく結びつかない。おそらく「やしろもこへぬべくおもほゆるかな」の語釈に挙げた万葉集巻七所収歌の異伝と考えられ、結句は「恋のしげきに」が本来の表現だったのだろう。「こひ（比あるいは悲）」が「こと（止あるいは登）」と誤写されたと思われる。とすれば、初句の「かへ（部）て」も「かけ（个）て」だった可能性がある。

恋の絶え間ない苦しみのために、注連縄を掛けて清め祭る社でも踏み越えて入ってしまうほど、手の届かない許されぬ恋の相手を一途に逢いに行きたく思われるというのであろう。『伊勢物語』第七十一段に「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」と見え、『拾遺抄』に「ちはやぶる神のやしろもこえぬべしいまは我がみのをしげなければ」（恋上・二四六、人丸）とあるのも同想。なお後者は、『拾遺和歌集』恋四・九二四では第二句「神のいがきも」、結句「おしけくもなし」。

七　**さほ過てならの手向に置ぬさは**
　　いもにあひ見むしるしとてなり

【異同】○頭注　新千　○過て　すぎて　○置　をく　○見む　みむ　○しるし　しばし

【通釈】佐保を過ぎて奈良山の神への手向け所に奉る幣は、（旅の安全を祈るものだが、今回は、佐保の邸で待つ）妻に再会できるよう霊験を期待して置いたのである。

【語釈】○**さほ**　佐保。奈良時代、高官の邸宅地。『懐風藻』に「初春、於作宝（＝佐保）楼、置酒」と題する長屋王の詩が収められていて、佐保には長屋王の別邸もあったことが知られる。○**ならの手向**　奈良山の道の神に道中の安全を祈るところ。越えて行く山路の登りつめた峠にあることが多い。「たむけ（手向）」は中世「たうげ（峠）」となる。『古今集』に「朱雀院のならにおはしましたりける時にたむけ山にてよみける／このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」（羇旅・四二〇、すがはらの朝臣）など。○**ぬさ**　幣。旅の安全を神に祈るための供物。『万葉集』に「…手向為等　恐乃坂尓　幣奉…」（巻六・一〇二二）など。○**いもにあひみん**　将来、また妻に逢う。「あひみる」は男女が関係を結ぶ。「ん」は、未来の推量を示す助動詞。『万葉集』に「不相見者　不恋有益乎　妹乎見而　本名如此耳　恋者奈何将為」（巻四・五八六）など。

○**しるしとてなり**　しるしと思ってである。「しるし」は、霊験・効能。また、それをもたらすもの。「と」は引用の格助詞。「て」は接続助詞。「なり」は断定の助動詞。『蜻蛉日記』に「ゆふだすきむすぼほれつつなげくことたえなばかみのしるしとおもはん」（一〇八）など。

【他出】

○『万葉集』巻三・三〇〇

長屋王駐馬寧楽山作歌

佐保過而　寧楽乃手祭尓　置幣者　妹乎目不離　相見染跡衣

○『和歌初学抄』二七六　藤原清輔作。一一六六年以前成立。

さほすぎてならのたむけにおくぬさの
いもをめかれずあひみしめとぞ

○『古来風体抄』三九、長屋王　藤原俊成作。一一九七年成立。

佐保過ぎて寧楽の手向に置く幣は　妹を目離れずあひ見しめとぞ

○『新千載和歌集』恋二・一二三〇　一三五九年成立。

題しらず　聖武天皇御製

さほ過ぎてならの手向におくぬさはいもにあひみんしるしなりけり

【参考】他出に挙げた『万葉集』所収の長屋王の歌の異伝。長屋王が馬を駐めた「寧楽山」は、歌姫越なら現在の添御県坐神社辺り、般若寺越なら現在の奈良豆比古神社辺りが想定される。

下の句「妹を目離れず相見しめとぞ」が難解だったためか、「妹に相見んしるしなりけり」という本文になっている。「相見しめとぞ」の「しめ」は使役の助動詞「しむ」の命令形で、「（妻に絶えず）逢わせてください、との願いからである」の意。『万葉集』には「…力奈美夜麻　多牟気能可味尓　奴佐麻都里　安我許比能麻久
…奈泥之故我　波奈乃佐可里尓　阿比見之米等曽」（巻十七・四〇〇八、大伴池主）にも同じ表現が見える。俊成は、『古来風体抄』に万葉集の本文で引く一方、「…手向におくぬさは」「しるしとてなり」「しるしなりけり」に通じる「あふさかのせきもる神にたむけせしぬさのしるしはこよひなりけり」（長秋草・九）という一首も詠んでいる。「しるしとてなり」は本歌だけの表現だが、「しるしなりけり」「しるしなりける」「しるしなりけれ」は、『百人一首』に採られて有名な「風そよぐならのを川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける」（九八、従二位家隆）を待つまでもなく、古今集時代から既に見られ、『貫之集』の「同じ七年右大臣殿屏風のうた／人の家に男女庭の菊みる／植ゑてみる菊といふきくは千世までに人のすぐべきしるしなりけり」（三七〇）をはじめ、のべ二五五例を数え、和歌の一つの定まった形式と言える表現であった。

なお、『新千載和歌集』の撰者、二条派の御子左入道大納言為定（一二九三～一三六〇）は、『奈良御集』に見える本歌を採り、奈良の帝＝聖武天皇と考え、「聖武天皇御製」とした。

八　ひまなくはかたといふなるきくみれば
見るたびごとにこひこそまされ

【異同】○本　本マ、　○見る　見な　○こひ　恋

【通釈】ひっきりなしに、色が移り変わるというように聞いている菊を見ると、見るたびに、菊の色が深まっていくように、恋の思いも募っていくことだ。

【語釈】○**ひまなくは**　「ひまなく」は、絶え間なく、ひっきりなしに、の意。『村上天皇御集』に「うらみつのはまにおふてふあしげみひまなく物をおもふころかな」（七〇）など。「は」は強調の係助詞。○**かたといふなる**　「かた」は未詳。「本」と傍記。底本が書写された時、既に本文が乱れ、親本にそうあったらしい。本来「うつる（宇川留）」とあった本文を「かた（可多）」と誤読した可能性が高い。『醍醐御時菊合』に「きくのはなしもにうつるとをしみしはこきむらさきにそむるなりけり」（一四）など。「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。『古今集』に「みちのくに有りといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり」（恋三・六二八、ただみね）など。○**きくみれば**　菊を見ると。『古今集』に「仁和寺にきくのはなめしける時にうたそへてたてまつれとおほせられければ、よみてたてまつりける　平さだふん／秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば」（秋下・二七九）など。○**見るたびごとに**　見るたび。見るごとに。『家持集』に「うつくしとみるたびごとになでしこのはなのさかりはなつかしなきみ」（七七）など。○**こひこそまされ**　恋心が募る。『万葉集』に「山吹乎　屋戸尓殖弖波　見其等尓　念者不止　恋己曽益礼」（巻十九・四一八六）など。

【他出】ナシ

【参考】菊は、『万葉集』には見えない。『懐風藻』に至り、中国の菊水の故事を背景にした「菊酒」（秋夜宴山池）「泛菊酒」（秋日於長王宅宴新羅客）や菊の香を賞美する「菊気芳」（晩秋於長王宅宴）などの表現が現れる。平安時代に入ると、菊は、「きくみれば」の語釈に挙げた古今集歌のように、時間の経過と共に薄紅や薄紫「色のまさ」っていく花として、それが賞美の対象にもなっていく。

九　そめなくに　われにうつれる妹が香の　ゆらゝゝこゝにこゝらにほへる

【異同】○妹　いも　○ゆらゝゝ　ゆら〳〵

【通釈】匂いが染み込むほど深く関わったわけではないのに、私に匂いが移ったあなたの香が、たっぷりとこんなにもいっぱい匂っていることだ。

【語釈】○**そめなくに**　匂いが染み込むほど深く関わったわけではないのに。『万葉集』に「紅　衣　染　雖欲　著丹穂　哉　人可知」（巻七・一二九七）など。○**ゆらゝゝ**　たっぷりと豊かであるさまを表す副詞。『源氏物語』に「かみは、あふぎをひろげたるやうにゆらゆらとして」（若紫①一五七）など。○**こゝに**　この身に。このように。『古今集』に「折りつれば袖こそにほへ梅花有りとや

ここにうぐひすのなく」（春上・三二）など。○こゝら　こんなにもはなはだしく。『古今集』に「こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてここらなくらむ」（春下・一〇九、そせい）など。

【他出】ナシ

【参考】『古今集』に「方たがへに人の家にまかれりける時に、あるじのきぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよみける／蟬のはのよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな」（雑上・八七六、きのとものり）などと同想の歌が見える。「妹」は万葉時代の語彙だが、「香」は万葉集に「秋の香」「橘の香」「梅の香」が各一例あるのみで、「妹が香」という歌語は、本歌以外には、俊恵（一一一三～一一九一）の家集『林葉和歌集』に「雪の色をさこそうばはめむめの花いもが香をさへぬすむべしやは」（春・六九）と見えるのみである。

※「奈良御門御集」（五〇一・八四五）には、九番歌と一〇番歌との間に補入記号を付し、その行間に細字で、

よめのみこたち、かたちよしときこしめして、
よませ給へる御中

補2　女八と女又[五]のみやとくらぶれば
いづれかかほのひかりまされる

と書き入れられている。

さらに巻末には、「**已下二首　可入女八の次**」とし、

桜の花のちるをおらんとて

補3　殿公も花をばおしくおもほすを
いとゞもふるにちる桜かな

とのもりもおぼしめしける

補4　ひとつきをみそかによせば
とのもりにそよるあまりはかりにまからん

という二首が追記されている。

【参考】「奈良御門御集」（五〇一・八四五）に補入されている右の三首については、和歌として未成熟な感じが否めず、意味不明な箇所も多い。それぞれ、参考になりそうな例歌を挙げ、簡単に言及する。

補2は、『四条宮下野集』に「とう三条殿におはしますころ、殿上人のまゐりたまはぬひまにだに御つぼねにまゐりてつれづれなぐさめん、とて、みやづかさどものきて、ものいひいひてのはてに、すけよし、たかふさがいふ、『宮づかさのかたちよきみやよ』といひて、『されどもわれはまさりたり』とあらそひて、『これさだめさせたまへ』といふを、『いまひとびとにかたり、かたわきてこそ』

などいひて、このことを人人によゐのつれづれにかたれば、ちくぜん、しきぶの命婦など、『たかふさはまさる』とあるに、すけよしがかたによりて、かたみにあらそひわらひて、夜ふくるまでいひあかして…」（三七詞書）などと見えるような状況が彷彿とする。「東三条殿」（藤原頼通邸）において、皇后寛子のつれづれを慰めようと、皇后職の役人藤原資良と源高房の「かたちよき」二人が、筑前、式部の命婦、下野といった女房を巻き込んで美貌を争っているが、つれづれを慰める話題として、男女限らず、美貌に関する事柄はよく話題に上ったにちがいない。また、『元良親王集』に「あふみのすけなかき（近江介平中興）がむすめども、かたちよく、こころたかしとききたまてつかはしける」（一三二詞書）などとあるように、美貌の噂を聞いて贈歌するのは、恋の一つのプロセスでもある。補2では「きこしめして」という二重敬語を使用し、「奈良の帝」の歌らしく装う。

補3は、『赤染衛門集』の「いみじうちりまがふを／をしみにときつる心もあるものをみるさへにしもちる桜かな」（四九四）と結句が共通する。散る桜を惜しむ類型的な詠歌だが、『万葉集』に「伊尓之散乎　於母保須良之母　和期於保伎美　余思努乃美夜乎　安里我欲比売須」（巻十八・四〇九九）などと見えるような「おもほす」という敬語を歌に使用し、やはり「奈良の帝」の歌らしく装う。

補4は、『拾遺抄』に「延喜御時に南殿のさくらのちりつもりて侍りけるを見て／とのもりのともの宮つこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな」（雑上・三九七、公忠朝臣）などと見える「とのもり」、『万葉集』に「山上憶良臣罷宴歌一首／憶良等者　今者将罷　子将哭　其彼母毛　吾乎将待曽」（巻三・三三七）などと見える「まからん」といった珍しい歌語を使用するが、第四句は「そよる」のままでは意味がとれない。この歌も、詞書に帝や院、中宮などに限って用いられる「おぼしめす」を使用し、「奈良の帝」の歌らしく装う。

一〇　こむといへばあなてかしこし　ふぢなみの
　　おもかげにのみみゆるいもかな　一二ウ

【異同】○ふぢ　藤

【通釈】これから伺いますとあなたに伝えると、なんとも不思議なくらい恐れ多い気持ちになります。面影が浮かぶばかりで、実際には逢えない存在だと思っていたあなたですから。

【語釈】○**こむといへば**　そちらへ行くと言うと。「来」は、目的地を主とした言い方。「む」は意志。『万葉集』に「将来云毛　不来時有乎　不来云乎　将来常者不待　不来云物乎」（巻四・五二七、大伴郎女）、「妹登曰者　無礼恐　然為蟹　懸巻欲　言尓有鴨」（巻十二・二九一五）など。○**あなてかしこし**　まことに恐れ多い。「な（那）」は「や（耶）」、「て（天）」は「に（耳）」の誤写で、『万葉集』に見られる「可気麻久母　安夜尓加之古思」（巻十八・四一一一、大

伴家持）などと同じ「あやにかしこし」だったか。「あやに」は、なんとも不思議なくらい、という意味の副詞。「かしこし」は、恐れ多い、という意味の形容詞。○**ふぢなみの**　「おもかげ」を導く枕詞。『万葉集』に「藤浪乃　思繼　若草乃　思就西　君自二　恋八将明　長此夜乎」（巻十三・三二四八）など。○**おもかげにのみみゆる**　面影にばかり見える。実際には会えない。『万葉集』に「如是許　面影耳　所念者　何如　将為　人目繁　而」（巻四・七五二）、『古今集』に「こし時とこひつつをればゆふぐれのおもかげにのみ見えわたるかな」（墨滅歌・一一〇三、つらゆき）など。

【他出】ナシ

【参考】手の届かぬ雲の上の存在だった憧れの女性を初めて訪ねる男性の歌。身分差があったのか、恐れ多い気持ちを抱きつつ、これから実る恋の喜びを詠む。

一一　**春日山あさゐるくもの風をいたみ**
　　たゆたふこゝろ　我はしもたゞ

【異同】○くも　雲

【通釈】春日山に朝かかっている雲が、風が激しいので、ひと所にとどまらないで漂うように、さだめなく揺れ動く心よ。私はただ…（為す術なく、風に流されるばかりです）

【語釈】○**春日山あさゐるくもの**　春日山に朝かかっている雲。『万葉集』に「春日山　朝居雲乃　鬱　不知人尓毛　恋物香聞」（巻四・六七七）など。○**風をいたみ**　風が激しいので。「を」は間投助詞。「いた」は形容詞「いたし」（激しい）の語幹。「み」は原因・理由を示す接尾語。『万葉集』に「風乎疾　奥津白浪　高有之　海人釣船　浜眷奴」（巻三・二九四）など。○**たゆたふこゝろ**　あちらこちらとさだめなく揺れ動く心。『万葉集』に「浦触而　物莫念　天雲之　絶多不心　吾念莫国」（巻十一・二八一六）など。○**我はしもたゞ**　「しも」は強調の副助詞。「ただ」は副詞で、取り立てた事をしないで、そのまま、の意。副詞の修飾する動詞が省略された形。私はただ風に流され、為す術なく、風が収まるのを待つばかり、というところか。「ただ」で終わる歌は、『増基法師集』に「わりなくも心ひとつをくだくかなよをへて岸にたつ浪はただ」（三九）、『千載和歌集』に「かかりける涙と人もみるばかりしぼらじ袖よくちはてねただ」（恋二・七〇七、雅兼）など。ただし、他出に示す和歌の結句のように「もたる」（ラ変動詞「持たり」の連体形）という動詞を意識して「ゝ」を「る」の誤写とし、「我はしもたる」（「し」は強調の副助詞）という本文の想定も可能か。二一番歌参照。

【他出】

○『仁和御集』一五

　近江更衣に

春日山あさゐる雲の風をいたみ　猶予情われはもたらし

○『続後拾遺和歌集』恋一・六九四　一三二六年成立。

近江更衣にたまはせける　光孝天皇御製

浅香山あさゐる雲の風をいたみ　たゆたふ心我はもたらじ

【参考】「たゆたふ」は、『万葉集』に「大船　猶預不定見者」（巻二・一九六、柿本人麿）「大海尓　嶋毛不在　海原　絶塔浪尓　立有白雲」（巻七・一〇八九）「大船乃　絶多経海尓　重石下　何如為鴨　吾恋将止」（巻十一・二七三八）「家尓底母　多由多敷命　浪乃宇倍尓　思之乎礼波　於久香之良受母」（巻十七・三八九六）などと見え、他出に挙げた『仁和御集』の「猶予情」も「たゆたふこころ」と訓むことが知られる。また、『続後拾遺和歌集』では「春日山」が「浅香山」に置き換えられているが、『万葉集』に「安積香山影副所見　山井之　浅心乎　吾念莫国」（巻十六・三八〇七）と見え、『古今和歌六帖』に「あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは」（二・九八五）と見えるように、「あさか山」は音の連想で「あさ（浅・朝）」を導く歌枕として「春日山」よりも相応しいと考えられたのであろう。

一二　つきくさにそめびとからぞ　いろふかく
そめつけつればうつろはずといふ

【異同】○つきくさ　月草　○いろふかく　色ふかき

【通釈】ツユクサ染めは（色褪せやすいものといいますが）染める人しだいなのです。念を入れて色を深く染め出したら簡単には色褪せないと言いますよ。

【語釈】○つきくさに　五番歌に既出。第二句・第四句の「染め」に係る。○そめびとからぞ　「そめびと」は、染める人。『恵慶法師集』に「そめびとは露ときえしをからにしきみねのあきぎりおのれたつらむ」（二三二）など。「から」は原因・理由を示す格助詞。…しだいで。『古今集』に「ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋のよなれば」（恋三・六三六、凡河内みつね）など。新編国歌大観は「かく」と翻刻するが、宮内庁書陵部蔵「奈良御集」（五〇六・七五）もやはり「から」とあり、誤り。「ぞ」は、断定の終助詞。○いろふかく　色濃く。『万葉集』に「紅之　深染衣　色深　染西鹿歯蚊　遣不得鶴」（巻十一・二六二四）など。○そめつけつれば　染め出したら、いつも。「そめつく」は、染めて色や模様を付ける。『万葉集』に「紅　花西有者　衣袖尓　染著持而　可行所念」（巻十一・二八二七）など。「つれ」は完了の助動詞「つ」の已然形。「ば」は恒時条件を示す接続助詞。○うつろはずといふ　色褪せないという。『万葉集』に「紅尓　染而之衣　雨零而　尓保比波雖為　移波米也毛」（巻十六・三八七七）「時自久曽　雪者落等言　無間曽雨者落等言」（巻一・二六）など。

【他出】ナシ

【参考】本歌も「月草」「色深く」「染めつけ」「うつろふ」などという万葉語に引かれ、『奈良御集』の一首となったのであろう。

一三　紅のこぞめのころもそめかけて
　　いまだかるよりいろつかむかも

【異同】○紅　くれなゐ　○ころも　衣　○いろつかむ　色つかむ

【通釈】紅に色濃く染めた衣は、染めて（乾かすために物干竿に）掛けて、未だ乾くか乾かないうちに、色が付くだろうか。

【語釈】○紅のこぞめのころも…むかも　紅に色濃く染めた衣…だろうか。『万葉集』に「紅之深染之衣下著而上取著者事将成鴨」（巻七・一三一三）など。○そめかけて　染めて、乾かすために掛けて。『万葉集』に「浅緑染懸有跡見左右二春楊者目生来鴨」（巻十・一八四七）など。○かるより　「かる」は、乾く、乾燥するの意。西大寺本金光明最勝王経平安初期点（八三〇年頃）に「喉舌乾燥きて口に言ふこと能はずして」、『万葉集』に「無耳之池羊蹄恨之吾妹児之来乍潜者水波将凾」（巻十六・三七八八）など。「より」は、ある動作・作用が起点となって、それにすぐ続いて。…とすぐに。○いろつかむかも　色が付くだろうなあ。なお、新編国歌大観では、『奈良帝御集』も『新後拾遺和歌集』も「色づく」と濁って読んでいるが、歌語として「色づく」は、ほぼ例外なく、草木の葉に色がつく、紅葉する、の意で用いられている。ここは、色が付く、色が出る、という意なので、濁らない方が妥当か。

【他出】○『新後拾遺和歌集』恋二・一〇〇九　一三八四年成立。
　題しらず　聖武天皇御製
　紅のこぞめの衣そめかけて　いまだかるより色づかんかも

【参考】本歌も「紅のこぞめの衣」「染めかけ」「むかも」などという万葉語に引かれ、『奈良御集』の一首となったのであろう。そして、『奈良御集』にあったこの一首を『新後拾遺和歌集』の撰者が採り、奈良の帝＝聖武天皇と見て「聖武天皇御製」とした。

一四　ひとこそはさはにおほかれ　いきのをに
　　あやしくのれるいもにもあるかな　一三オ

【異同】○ひと　人　○ある　有

【通釈】人はほんとうに溢れるほどに多くいるけれど、私の命綱として、ああ不思議なくらい、私の心を完全に占めてしまっているあなたであるなあ。

【語釈】○ひとこそはさはにおほかれ　人は溢れるほどに多くいるけれど。「こそ…おほかれ」は逆接強調。「は」は強調の係助詞。「さはに」は、多いさまを表す形容動詞の連用形。『万葉集』に「…人佐播尓満弖播阿礼等母…」（巻五・八九四）、「…人多満而雖有…」（巻十三・三二四八）「…比等佐波尓美知弖波安礼将…」（巻二十・四三三一）など。○いきのをに　「息の緒に」で、命の綱とし

て、命がけで。絶えず。常に。『万葉集』に「白雪能　布里之久山乎　越由加牟　君乎曽母等奈　伊吉能乎尓念」（巻十九・四二八一）など。○**あやしく**　驚きの声「あや」を活用させた形容詞「あやし」の連用形。原因・理由がはっきりとつかめず、不思議に思う気持ち。『万葉集』では強調の係助詞「も」を伴って「あやしくも」の形で用いられる。「安必意毛波受　安流良牟伎美乎　安夜思苦毛　奈気伎和多流香　比登能等布麻泥」（巻十八・四〇七五）など。○**のれるいもにもあるかな**　「のれるいも」は（私の心に重く）乗っているあなた。『万葉集』では、「心に乗る」で、自分の心を完全に占めてしまう、の意。「東人之　荷向篋乃　荷之緒尓毛　妹情尓乗尓家留香問」（巻二・一〇〇）、「春去　為垂柳　十緒　妹心乗在鴨」（巻十・一八九六）など。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「も」は強調の係助詞。「かな」は詠嘆の終助詞。

【他出】ナシ

【参考】『万葉集』に見える大伴家持が娘子に贈った歌「百礒城之大宮人者　雖多有　情尓乗而　所念妹」（巻四・六九一）と同想。第三句は「さはにあれど」と訓む説もある。

一五　かたこひにしにするものにしあらませば
　　千度ぞわれはしにかへらまし

【異同】○もの　物　○千度　ちたび　○われ　我

【通釈】もし片思いで死ぬものであったなら、何度も何度も、私は死ぬことを繰り返すだろう。

【語釈】○**かたこひにしにする**　片思いで死ぬ。「かたこひ」は片恋、片思い。『万葉集』に「為便毛無　片恋乎為登　比日尓　吾可死者　夢　所見哉」（巻十二・三一一一）など。「しにす」は、「死ぬ」の連用形から転成名詞化した「しに」にサ変動詞「す」が付いたもので、死ぬ、死すの意。『万葉集』に「恋尓毛曽　人者死為　水無瀬河　下従吾痩　月日異」（巻四・五九八）など。○**ませば…まし**　奈良時代の反実仮想の用法。片思いで死ぬことなどあり得ないが、もし…、の意。『万葉集』に「吾背児与　二有見麻世波　幾許香　此零雪之　懼有　麻思」（巻八・一六五八）など。平安以降、「ましかば…まし」が多くなる。○**千度**　ちたび。千回。度数の多いこと。『万葉集』に「将相者　千遍雖念　蟻通　人眼乎多　恋乍衣居」（巻十二・三一〇四）など。○**しにかへらまし**　「死に返る」は、死ぬことを繰り返す。『万葉集』に「恋為　死為物　有者　我身千遍死反」（巻十一・二三九〇）など。

【他出】

○『万葉集』巻四・六〇三、笠女郎
念西　死為物尓　有麻世波　千遍曽吾者　死変益

○『古今和歌六帖』四・二〇一七　一〇世紀後半成立。
こひするにしぬるものにしあらませば
ちたびぞわれはしにかへらまし（かさのらう女　ある本）

○『拾遺和歌集』恋五・九三五、人まろ　一〇〇五年頃成立。
恋するにしにする物にあらませば　ちたびぞ我はしにかへらまし
【参考】宮内庁書陵部蔵「奈良御門御集」（五〇一・八四五）には「於人丸／初句／恋するに」という頭注があるが、『人丸集』の「恋するにしにぬるものにしあらませば　我が身はちたびしにかへらまし」（一八九）は、初句に限らず、第二句・第四句も本文が微妙に異なる。「しにかへらまし」の語釈に挙げた万葉集巻十一所収歌を、人丸集の撰者が取り込んだものであろう。いずれにせよ、奈良御集における本歌の独創は、初句を、『万葉集』の「念西」「恋為」、『古今和歌六帖』『拾遺和歌集』『人丸集』の「恋するに」ではなく、「片恋に」とした点にある。

一六　いろみればしらたまみえつ　風吹て
なみたかくともとらではやまじ

【異同】○いろみれば　底本「いろみれば」の「ば」をミセケチにし、「ど」と傍記。色みれど　○しらたま　しら玉　○みえつ　底本「みてつ」　見てつ　○吹て　ふきて　○とらでは　とらずは
【通釈】浪の色を見ていると、一瞬、真珠が見えた。風が吹いて、たとえ浪が高くても、取らずにはおくまい。
【語釈】○**いろみれば**　色を見ると。「色見れど」という用例は他になく、「色見れば」であったと想定される。『土左日記』に「なみとのみひとつにきけどいろみればゆきとはなとにまがひけるかな」（三〇）など。色彩の類似によって錯覚に誘われることをいう表現。○**しらたまみえつ**　真珠が見えた。底本「て（天）」は、「え（衣）」を「て（弓之）」と誤読した結果の誤写。「白玉」は白色の美しい玉。真珠。『万葉集』に「海神　持在白玉　見欲　千遍告　潜為海子」（巻七・一三〇二）、「為妹　我玉求　於伎辺有　白玉依来　於伎都白浪」（巻九・一六六七）など。「つ」は一瞬の動作の完了を表す助動詞。『古今集』に「吹く風の色のちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり」（秋下・二九〇）など。○**なみたかくとも**　たとえ浪が高くても。「とも」は逆接仮定条件を示す接続助詞。『万葉集』に「玉藻苅　海未通女等　見尓将去　船梶毛欲得　浪高　友」（巻六・九三六）など。○**とらではやまじ**　取らないでおくつもりはない。是非とも取りたい。「…ではやまじ」は、前田家蔵明王院旧蔵本『定頼集』に「風をいたみ空にうきたる白雲のゆくとはすともあはではやまじ」（三一二）など。『万葉集』に「見渡者　近物可良　石隠　加我欲布珠乎　不取不已」（巻六・九五一）などと見え、『万葉集』の訓読を意識すれば、宮内庁書陵部蔵「奈良御門御集」（五〇一・八四五）の本文「…ずはやまじ」が相応しい。「とらではやまじ」の用例を、底本の本歌以外に探ると、近世の村田春海（一七四六～一八一一）の歌文集『琴後集』に見える「むさしうたとて相聞の心を／玉河にしづくしら玉みえずともとらではやまじしづく白玉」（九〇二）まで時代が下る。

【他出】ナシ

【参考】『万葉集』の「嶋廻為等　磯尓見之花　風吹而　波者難縁　不取不止」（巻七・一一一七）「海底　沈白玉　風吹而　海者難荒　不取者不止」（同・一三一七）などが同想。

一七　すゞきとるあまのを船のいさりびの　ほのかにだにやいもにあはざらむ

【異同】○を船　小舟　○いさりび　いさり火

【通釈】鱸を捕る漁夫の乗る小さな舟の漁火のように、せめてほんやりとでも妻に逢えないものか。

【語釈】○すゞきとる　鱸を捕る。『万葉集』に「鈴寸取　海部之燭火　外谷　不見人故　恋比日」（巻十一・二七四四）など。○あまのを船　漁夫が漁のために乗る小さな舟。『万葉集』に「…安麻乃乎夫祢波　伊里延許具　加遅能於等多可之…」（巻十七・四〇〇六）など。○いさりびの　古くは「いざりひ」「いざりび」。夜、魚を漁船の方へ誘い集めるために燃やすたいまつ、かがり火。「ほのかに」を導く。『万葉集』に「思香乃白水郎乃　釣為燭有　射去火之　髣髴妹乎　将見因毛欲得」（巻十二・三一七〇）など。○ほのかにだにやいもにあはざらむ　せめてほんやりとでも妻に逢えないものか。『万葉集』に「切目山　往反道之　朝霞　髣髴谷八　妹尓不相牟」（巻十二・三〇三七）など。「だに」は最小限を示す副助詞。「や」は疑問の係助詞。

【他出】

○『万代和歌集』恋一・一八三九　一二四八年成立。

題不知　聖武天皇御製

すずきとるあまのをぶねのいさりびの
ほのかにだにやいもにあはざらむ

○『続古今和歌集』恋三・一一四七　一二六五年成立。

だいしらず　聖武天皇御歌

すずきとるあまのをぶねのいさりびの
ほのかにだにやいもにあはざらん

○『夫木和歌抄』一三二〇八　勝間田長清撰。一三一〇年頃。

同（題しらず）、万代　聖武天皇御製

鱸つるあまの小舟のいさりびのほのかにだにやいもにあはざらん

【参考】「鱸とる」「あまの小舟」「漁火のほのかに」「ほのかにだにや妹にあはざらむ」などという『万葉集』に見える表現に引かれ、『奈良御集』の一首となったのであろう。そして、『奈良御集』にあったこの一首を、『万代和歌集』の撰者が採り、奈良の帝＝聖武天皇という見方に従い、「聖武天皇御製」としたと考えられる。

かたはらの女御の、そねみたまひ
けるに、みかどにたてまつりたま　一三ウ
ひける

※補入記号のみ有り、歌は欠。

【異同】○たまひ　給ひ　○たまひ　給ひ

【通釈】　傍らの女御の、嫉妬なさった時に、帝に献上なさった歌

（歌　欠）

【語釈】○**そねみたまひけるに**　「そねむ」は、自分より優れている者や運のよい者を羨み、妬む。『源氏物語』に「はじめより我はと思ひあがりたまへる御かたゞ、めざましき物におとしめそねみ給ふ」（桐壺①四）など。

【他出】ナシ

【参考】『後撰集』雑一・一〇八〇に「まだ后になりたまはざりける時、かたはらの女御たちそねみたまふけしきなりける時、みかど、御ざうしにしのびてたちよりたまへりけるに、御たいめんはなくて、たてまつれたまひける　嵯峨后」という詞書・作者表記で、「事しげし　しばしはたてれ　よひのまにおけらんつゆはいでてはらはん」（あまり早くお出でになりますと）噂の種になります。今しばらくは（部屋に入らないで外で）立って待っていてください。もし宵の間に露が置いたら、その露は私が外へ出てお払い申し上げますから）という一首が見える。欠脱している歌は、同歌か。「嵯峨后」は、嵯峨天皇皇后、橘清友の女、智子。弘仁六年（八一五）七月、立后。「檀林皇后」として知られる。嘉祥三年（八五〇）六十五歳で没。『奈良御集』に相応しくないと判断した誰かが、和歌を削除したか。

筑前のすけ紀のよし

のりに、きぬをさくらのえだに
つけてたまはするに

一八　世中のひとのえやすきものなれど
はなのおりえだおもふこゝろあり

【異同】○えだ　枝　○たまはするに　給はするに　○世中　よの中　○ひと　人　○もの　物　○はな　花

【通釈】　筑前国の介（次官）、紀のよしのりに、衣を、桜の枝に付けてお与えになる時に、

世の中の人の手に入れやすい物であるけれど、花の折枝に感謝の念が籠もっているよ。

【語釈】○**筑前のすけ**　筑前国の介。「筑前」は、古代からの大陸文化流入の地で、国防上の要地でもあるため、西海道諸国を管轄する大宰府が置かれた。「すけ」は、国司の守（かみ）（長官）・介（すけ）（次官）・掾（じょう）（三等官）・目（さかん）（四等官）の一つ。筑前国は上国で、その「介」は、位階では従六位上に相当する官職。○**紀のよしのり**　『尊卑分脈』に見えず、未詳。○**えやすき**　手に入れやすい。『相模集』に「むこまうす／ひとりのみあるものならばたきもののこはえやすしと思ひしらなむ」（三九〇）など。○**おりえだ**　折枝。歴史的仮名遣いでは

「をりえだ」。折り取った木の枝。歌語としては他に用例を見ない。『枕草子』に「からぎぬ・かざみなどに、をかしきをりえだども、ながきねにむらごのくみひもして、むすびつけたる」（節は五月にしく月はなし）など。○**おもふこゝろ**　衣を賜う場面であるから、禄・褒美・祝儀を与え、感謝の念や祝意であろう。『万葉集』に「九月之（ナガツキノ）　其始鴈乃（ソノハツカリノ）　使尓毛（ツカヒニモ）　念心者（オモフココロハ）　所聞来奴鴨（キコエコスカモ）」（巻八・一六一四）など。

【他出】

○『万代和歌集』巻下・二八七　一二四八年成立。

きぬをさくらの枝につけて人にたまはすとて　聖武天皇御製

世中のひとのえやすきものなれどはなのをりえだおもふこころあり

【参考】和歌文学大系13『万代和歌集』（安田徳子）は上の句に「「きもの」（着物）が隠されている」と注するが、「きもの」という語が一般化するのはかなり後で、断定には慎重を要す。たしかに、中古の物語である『うつほ物語』俊蔭にも「草木のねをくひものにして、いは木のかはをきものにし、けだものをともとして、木のうつほをすみかとして、おひいでたれど」（文化三年補刻絵入本）などと既に「きもの」の用例が見られるが、他に用例は見えず、一般的な語ではなかったらしい。中世後期に一般化した「きるもの」が主流となって近世前期に多用されたが、単語として安定した語形ではないため、「きる」を四段動詞と考えて、その連用形で複合名詞他した「きりもの」という語も、『日葡辞書』（一六〇三～四）に「qirimonouo（キリモノヲ）キル」、『東海道中膝栗毛』に「おとこのきりもん着て」などと使われた。

一九　かみながし　一斤ぞめをばきたれども
かたちぞすこしうちあはざめる

一斤染きたる女の、かみよしと
御覧じけるが、みめのわろか
りければ　」四オ

【異同】○詞書　二行「よめのみこたち、かほよしときこし／めして、よませ給ひける」と本文と同筆で書かれ、その首尾に削除記号を付け、下に「不可在此刻」と注記。補2詞書参照。○わろかりければ　わろかりけれ

【通釈】

一斤染（いっこんぞめ）を着ている女で、髪が美しいと御覧になっていた女が、顔だちがよくなかったので、

あなたは、髪が長い。そしておしゃれな一斤染を着ているけれども、姿が少し似合っていないようですね。

【語釈】○**一斤染**　紅花（べにばな）一斤で絹一疋を染めた色。薄紅色。『日本紀略』延喜十八年（九一八）三月十九日条に「仰検非違使自来月一日可制火色之由。但以紅花大一斤為染絹一疋之色給本様」と見え、紅花染の許可限度の色だったらしい。平安後期成立の有職書『助無智秘抄』に「検非違使（けびいし）は、あをばかまに一こんぞめ」、『山槐記』治承

三年（一一七九）三月三日条に「今日宇治一切経会也…右衛門権佐光長茶染一斤染烏帽子」など。○**みめ**　見た目。顔だち。『枕草子』に「法師などの…経たふとくよみ、みめきよげなるにつけても」（位こそ猶めでたき物はあれ）など。○**うちあはざめる**　「うちあふ」の「うち」は接頭語で「合ふ」（似合う）に同じ。「ざ」は打消の助動詞「ず」の連体形「ざる」の撥音便「ざん」の「ん」の無表記。「める」は、視覚による推量の助動詞「めり」の連体形。婉曲表現である。「…ざめり」は他に和歌の用例を見ない。

【他出】ナシ

【参考】「一斤染」を『新編国歌大観』『新編私家集大成』共に「一片染」と読むが、底本（図3）や書陵部の二本（図4・図5）を見ても「一斤染」と読むのが正しかろう。

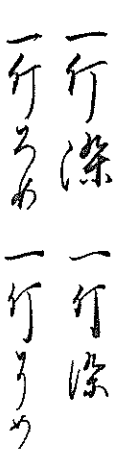

図3　底本　　図4　奈良御集　　図5　奈良御門御集

めでたくおぼしめしける女の、
ちかをとりしければ、よませた
まへる

二〇　さいとうにひとのありける（　　）
かひはけなくもおもほゆるかな

【異同】○かひはけなくも　かひはなくも

【通釈】

すばらしいとお思いになっていた女が、近くで見ると見劣りがしたので、お詠みあそばした歌

神仏の灯明に照らされた人がいた…
ほんとうに甲斐なく思われることだなあ。

【語釈】○**ちかをとり**　近劣り。近くで見ると、遠くで見るより劣って見えること。『定頼集』に「ははきぎはちかおとりすといふなるををばすて山のみちにいはなん」（前田家蔵明王院旧蔵本・三二五）など。○**さいとう**　斎灯。柴灯。斎戒して柴薪などを神仏の前で焚くこと。また、そのかがり火。十二世紀後半に成立する『梁塵秘抄口伝集』に「さいとうの火の光あらで、衝立、障子を少し隔てて、誰ともなきやうにて」など。○**かひ…なくもおもほゆるかな**　『古今和歌六帖』に「いせのうみのちひろのはまにひろふともいまはかひなくおもほゆるかな」（五・三一二四、あつただ）など。

【他出】ナシ

【参考】初句「さいとう」は未詳。「斎灯」あるいは「柴灯」と表記される神仏の灯明と解しておく。美人だと思っていた女の顔が灯明に照らされてがっかりという場面が想定される。第三句は本文が欠脱し、底本は空白になっている。第四句も「かひなく」以外は「は」「け」「も」など落ち着きが悪い。いずれにせよ、かなりの本文の乱れが想定される。

きり〳〵すのなくを、きこし　」四ウ
めして

二一　きりゞゝすつゞりさせとぞ鳴めれど
むらぎぬもたるわれはきゝおはず

【異同】○きり、、す　きり〳〵す　○鳴　なく　○われ　我

【通釈】コオロギの鳴くのを、お聞きになって
コオロギが（冬を迎える準備に）「綴り刺せ（着物のほころびを綴って繕え）」と鳴いているようだけれど、一疋の絹を持っている私は、その鳴き声を聞いても自分の事が言われているとは思わないよ。

【語釈】○きりゞゝす　いまのコオロギ。二十巻本『和名抄』に「蟋蟀　木里木里須」。『万葉集』の「蟋蟀」「蟋」は旧訓では「きりぎりす」と訓んだが、ほとんどが字余りになるので、賀茂真淵以後「こほろぎ」と訓む。『万葉集』に「秋風之　寒吹奈倍　吾屋前之　浅茅之本尓　蟋蟀鳴毛」（巻十・二一五八）など。八代集では「こほろぎ」が詠まれることはなく、すべて「きりぎりす」である。○つゞりさせとぞ鳴めれど　『芸文類聚』巻九十七「蟋蟀」の項に「詩義疏曰、蟋蟀似蝗而小、正黑、目有光沢、如漆、有角翅。幽州人謂之趣織。督促之言也。里言趣織鳴、嬾婦驚」とあり、蟋蟀は、冬を迎える準備に、機織を促して鳴く虫とされ、それを受け、『古今集』に「秋風にほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふ蟋蟀なく」（雑体・一〇二〇、在原むねやな）などと詠まれている。「綴る」は、衣服の破れた所を糸でつぎ合わせること。蟋蟀は、冬が近いので「綴り刺せ」といって鳴くようだけれど、というのである。鳴き声に基づく推定なので、他出に挙げる『家持集』の本文のように、聴覚による推量の助動詞「なり」を用いたいところ。○むらぎぬもたる　「持たり」の連体形。一一番歌「我はしもたゞ」の語釈参照。『篁集』に「よみききてよろづのふみはわするともきみひとりをばおもひもたらん」（一〇）など。○われはきゝおはず　私は聞いても自分の事とは思わない。「聞き負ふ」は、聞いて自分の事と思う。『大和物語』第四十六段に「しらつゆのおきふしたれをこひつらむ我はききおはずいそのかみにて」（六三）など。

【他出】
○『家持集』二五四　一一世紀前半成立。
きりぎりすつづりさせてふなくなれば
むらぎぬもたるわれはききいれず
○『袖中抄』六二九　一一八五年頃成立。
きりぎりすつづりさせとはなきをれど
むらぎぬもたる我はききいれず

【参考】本歌の結句は、『家持集』や『袖中抄』では「ききいれず」となっている。『馬内侍集』の「うしろめた神もききいれぬことな

れば我をわするるみそぎしつらん」（一〇九）や『為信集』の「さかきさしやしろがまへにいのるともさらにききいれじかみなしのもり」（四八）などのように、神が願いを聞き入れないとか、求婚を相手が聞き入れないとかという文脈で、「聞き入る」が歌語として用いられている例が見えるが、本歌の場合は、「聞き入る」より、自分に関係のある事として聞くという意の「聞き負ふ」の方がふさわしい。「聞き負ふ」の歌語としての用例は、多くなく、前田家蔵明王院旧蔵本『定頼集』に「そらしらぬ露のおきける花の上を我が袖とのみききおはれつつ」（二九九）など限られているので、分かりやすい「聞き入れず」が採用されたものと思われる。「聞き負ふ」は、散文では、『伊勢物語』にも「つねのことぐさにいひけるを、きゝおひける男」（百八段）「おのがよはひを思けれど、わかゝらぬ人はきゝおひけりとや」（百十四段）、『源氏物語』にも「われひとりしもきゝおふまじけれど、うとましや」（紅葉賀①二六一）などと用いられてきた語である。

二二　あさまだきをきてぞみつる　むめのはな
よのまのかぜのうしろめたさに

【異同】○詞書　前歌との行間に「梅花を又いとめで御して」と細字で書き入れ。○集付　拾元良親王　○をきて　おきて　○むめのはな　梅の花　○よのまのかぜ　夜のまの風

【通釈】朝早く起きて見たことだ。梅の花を。夜間の風が花を散らさなかったかと心配で。

【語釈】○**あさまだき**　朝、まだ夜が明けきらない時。早朝。『人丸集』に「かうち／あさまだきわがうちこゆるたつた山ふかくもみゆる松のみどりか」（二三八）など。○**よのまのかぜ**　夜間に吹いていた風。『源順集』に「康保五年、女五男八親王の御屏風の歌／人の家に、をんな二三人出でて、あかつきに花みる／花の色やよのまの風にかはるとてまづおきながら出ててこそみれ」（二〇八）など。

【他出】
○『拾遺抄』春・一四　九九六年頃成立。
題不知　読人不知
あさまだきおきてぞみつるむめの花よのまの風のうしろめたさに
○『拾遺和歌集』春・二九　一〇〇五年頃成立。
題しらず　兵部卿元良親王
あさまだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに

【参考】『拾遺抄』では「読人不知」だった本歌が、『拾遺和歌集』では「兵部卿元良親王」詠とされている。しかし、『元良親王集』には本歌は見えない。本歌が『奈良御集』に採られた時期は、『拾遺和歌集』成立以前、あるいは『拾遺和歌集』より『拾遺抄』が重んじられ流布していた平安時代後期だった可能性が指摘できよう。

九月ばかり菊花を

二三　もゝしきにうつろひわたるきくのはな　」オ
　　にほひぞまさる　よろづよのあき

【異同】○集付　続古　○歌右肩　集聖武　○菊花　菊の花　○きくのはな　菊のはな　○よろづよのあき　万代の秋

【通釈】　九月ぐらいに菊の花を
　宮中でずっと美しく色変わりしてゆく菊の花は、その美しさが増していくことです。末永く続くこの御代の秋という季節のなかで。

【語釈】○もゝしき　内裏。宮中。『醍醐御時菊合』に「ももしきにうつろふいろははつしものおきてかひあるこよひなりけり」（二〇、なかつら）など。○うつろひわたる　ずっと美しく色変わりしてゆく。「わたる」は時間の継続を示す。『海人手古良集』に「やへぎくのうつろひわたる庭の面にかねても結ぶ夜半のしら露」（二八）など。○にほひぞまさる　美しさが増す。「にほひ」は視覚的な美しさ。「まさる」は、度合いが増す。程度がはなはだしくなる。『寛平御時菊合』に「やまざきのみなせのきく／うちつけにみなせはにほひまされるはをりひとからかはなのつねかも」（一）など。○よろづよのあき　「万代」は、御代が永久に続くことを祝っていう語。康保三年（九六六）『内裏前栽合』に「ちぢの色の花のくさぐさ月かげにほひぞまさんよろづよの秋」（一二、右兵衛督藤原忠尹朝臣）など。

【他出】
○『続古今和歌集』賀・一八八一　一二六五年成立。
　九月ばかり菊花を　聖武天皇御歌
　ももしきにうつろひわたるきくのはな
　にほひぞまさるよろづよのあき

【参考】『清正集』に「天暦の御時、方わかちて前栽あはせさせたまひけるに、中宮の御かたにはなのえだにてふのかたつくりて、つけさせたまひけるに／ここのへの露のをおけばやはなの色のほかのあきにはにほひまされる／ももしきに花の色色にほひつつちとせの秋は君がまにまに」（二九・三〇）などと見えるように、「ももしきに」「にほひぞまさる」（にほひまされる）「よろづよのあき」（ちとせの秋）などの語句に注目すれば、内裏で行われた前栽合や菊合などの催しの席上、臣下の立場から今上帝の在位の長久を願う祝意をこめての詠歌であったと考えられ、帝の御詠であったとは考えられない。

　　行幸のまたの日

二四　きゝやせし　おなじみちにし
　　ふきよりて　こゝろとよせ
　　し
　　あきのはつかぜ　」五ウ

【異同】○行幸　御嘗行幸　○また　又　○ふき　吹　○こゝろと　心と（傍記「を」）

【通釈】　行幸の翌日

聞きましたか。昨日の行幸と同じ道に吹き寄って、自分から吹き寄せた秋の初風の音を。

【語釈】○**行幸**　天皇が宮城を離れ、他所へ行くこと。「又の日」に「秋の初風」と詠んでいるので、夏越の御禊のための行幸だったのだろう。○**きゝやせし**　聞くことをしたか。「聞き」は動詞「聞く」の連用形からの転成名詞。「や」は疑問・反語の係助詞。「せ」はサ変動詞「す」の未然形。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。初句切れ。「…やせし」は、『後撰集』に「女郎花折りけん袖のふしごとにすぎにし君を思ひいでやせし」（秋中・三四九、枇杷左大臣仲平）など。『古今集』秋上の冒頭歌「秋立つ日よめる／あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（秋上・一六九、藤原敏行朝臣）などにいう秋「風のおと」をもう聞いたか、というのである。○**おなじみち**　行幸ルートと同じ道か。五行思想によれば秋風は西から吹くと考えられていたので、西河（桂川）で御禊が行われたことになる。『篁集』に「しばしばにあとはかなしといふ事もおなじ道には又もあひなん」（一五）など。○**こゝろと**　自分から。自発的に。『貫之集』に「心とてちらんだにこそをしからめなどか紅葉に風のふくらん」（二七六）など。○**あきのはつかぜ**　秋の訪れを初めて感じさせる風。『古今集』に「わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつ風」（秋上・一七一）など。

【他出】ナシ

【参考】「奈良御門御集」（五〇一・八四五）の詞書は「御嘗行幸の又の日」となっていて、大嘗会の前月に、即位した天皇が賀茂の河原などに出て、御禊をする「大嘗会御禊」の行幸とする。しかし、大嘗会は十一月の下の卯の日（三卯ある時は中の卯の日）より始まり、午の日の豊明節会に至る四日間に渡る行事で、その御禊は十月。季節は冬であり、「秋の初風」には相応しくない。ここは、歌仙本『順集』に「岩波の立返るせは井堰より夏越の御禊すとや聞らむ」と見えるような「夏越の御禊」でなければならない。

※「奈良御門御集」（五〇一・八四五）には、巻末に、

已上御製　文武聖武　相交相違也　但可任本

（以上の御製、文武天皇御製と聖武天皇御製とが、相交じり相違う状況にある。但し、書写した親本に任せてそのままとする）

という注記がある。